特32
562

事情

明治太平記

村井靜馬編輯

二十一編

上

村井靜馬編輯
鮮齋永濯畫

官事情許口記全

類國史
屬餘史
冊四十二
函六

東京書肆多田堂藏版

幾美米太五之
賀多
伊佐遠于楯迹志天
仁志乃之古雄良曾
武伎蘓米叙

編者

明治十二年十月廿九日印刷

敬賀幾壽

物部佐久間侍

武伎蘓米

賀多米太王之
遠于楯迩志天
乃之古雄良曾

編者

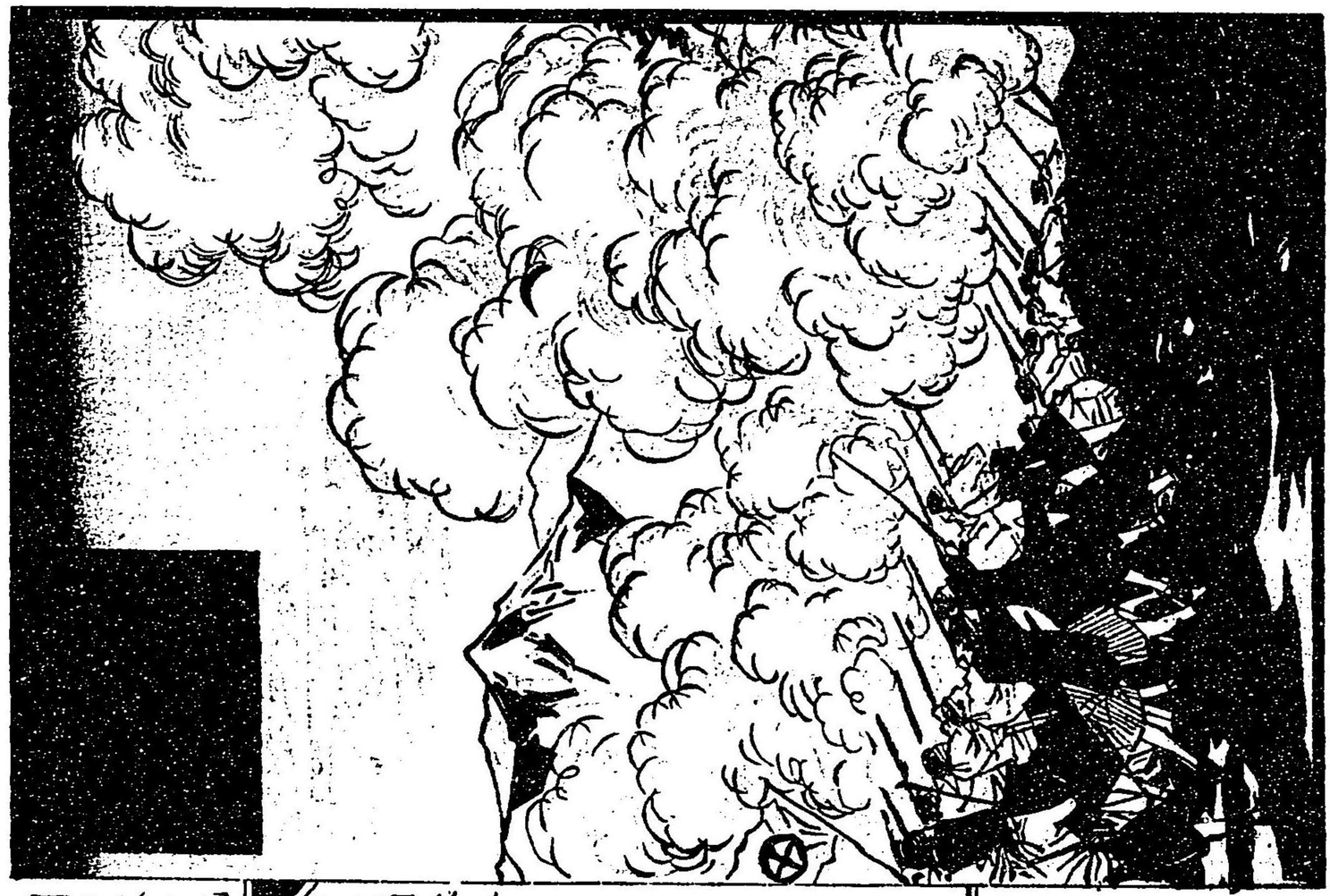
東京 堂藏版

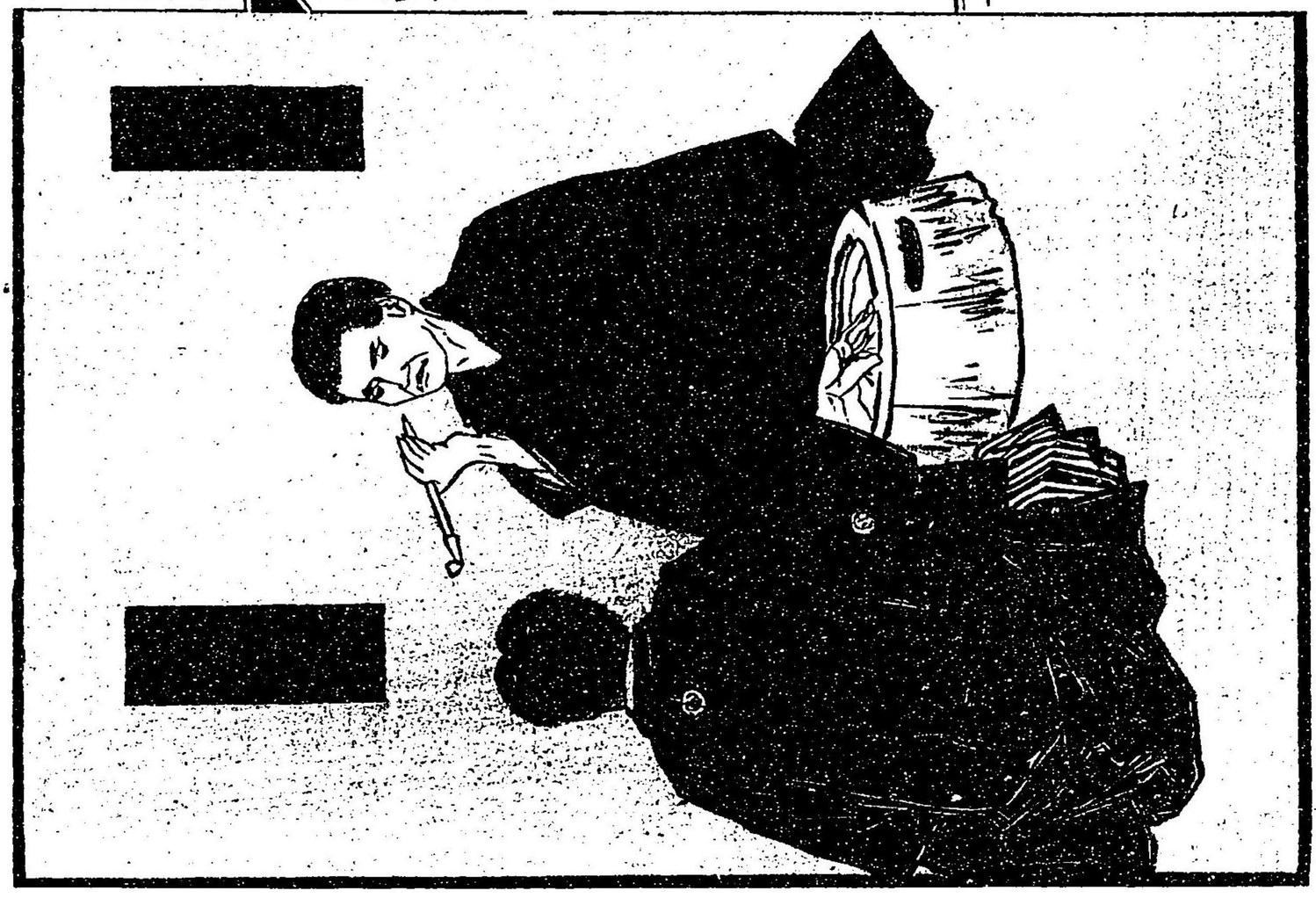
日本外史 鮮齋永濯譯 頼山陽著

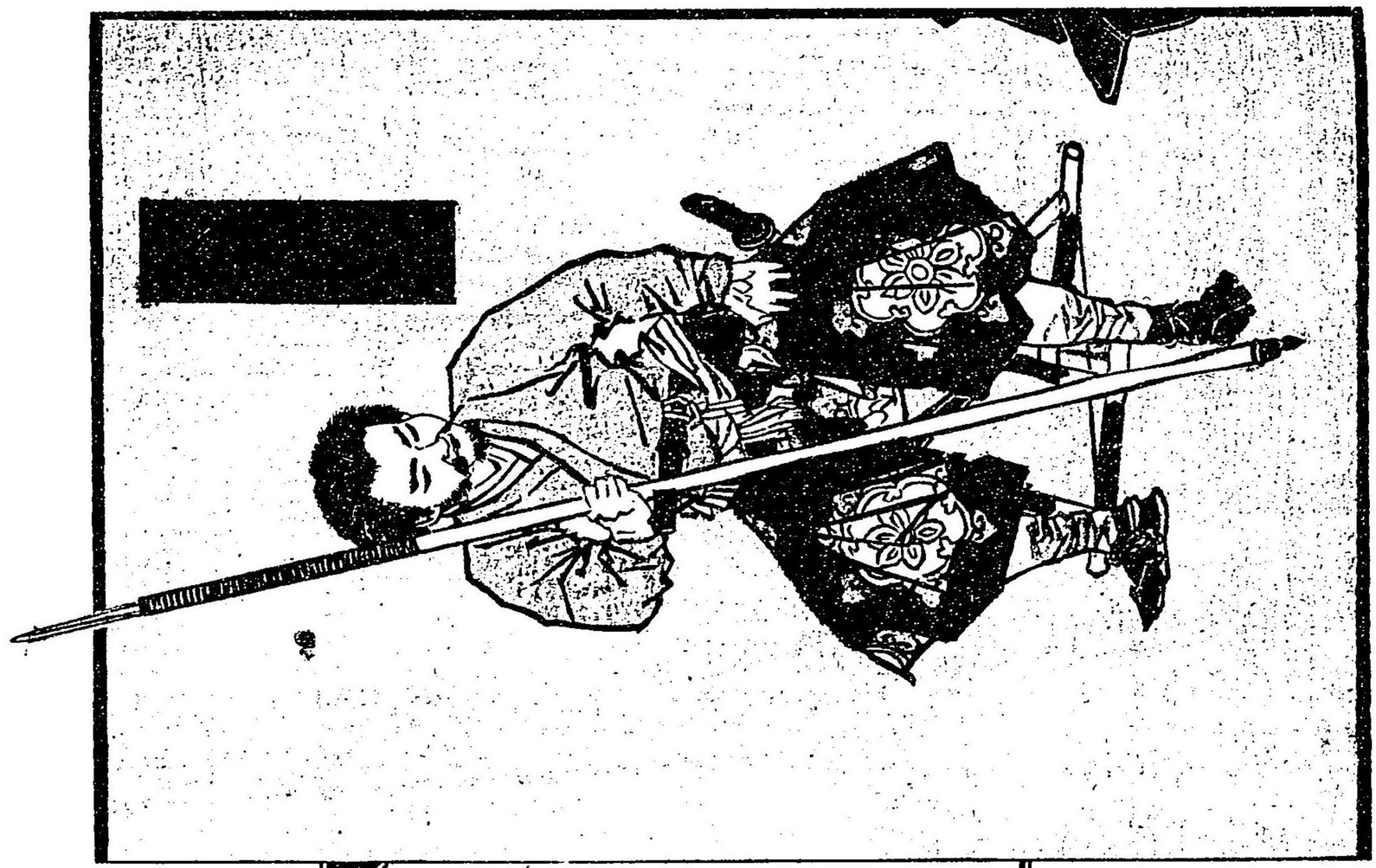
日記全

特事 [illegible]

頼山陽著 日本外史
類國史
屬稗史
冊四十二
函六冊
第四號







卷之一

水俣口の官軍進んで深川村を火くゝる起り山田少將諸軍を部署をる終る

卷之二

鹿兒島の軍磯村の後山に入る起り水俣と三好少將の本營とを終る

明治太平記廿一編卷之一

東京　村井靜馬著

再説五月十四日水俣口の官軍ハ進んで深川村を火きく墨を拔く矢代山の賊塁を依然として俯しく我が進路に臨むゆゑに進むこと能はずして兵を退く此時大隊旗及び大砲一門を奪ふ此日山靄未だ霽賊兵ハ馬見原の第一守線を侵し我兵を不意に襲ふ官軍周章て皆そゝ

賊進んで第二の防禦線に至る我兵は進を邀へ撃ち再び進んで賊と鏡山に逐ふ午後一時遂に第一線を復す是より先鹿兒島の別軍は日々海上より武村セバル山の賊壘に向ひて発砲する のみにして未だ進撃を試むるに至らず此日午前十一時我軍一大半隊は武の橋より路を三方に分ちて右翼は山路より左翼は海岸より中央は本道より谷山に向ひて進撃つ沿道の賊兵も

算を乱して潰走す我軍は徐々と之を進撃して谷山口新川の硝石庫を火き川を渉つて谷山村に放火す賊避て戦ふものなし豊後の賊徒勢ひ益猖獗を極め兵を分て縣廳に迫らんとす此時縣廳も未だ守衛の兵なし寡少の海兵のみ縣令は断然として守廳の策に決し官吏をらびに警察吏を部署し海兵と共に府内城に據て防禦せんとす巡査隊は戸次野津の二驛に防

ぎく賊を詭き一万の陸兵来りて既に城守をと宣言を然るども我兵寡少なるを以て退いて城に入らんとして退軍の喇叭を吹き鳴らせしに賊其譜を知らざるみやうりうんと聞て自ら潰走し遂に避て鶴崎を侵さんとする時に東京巡査隊を佐賀の関に上陸して府内に至らんとして此夜鶴崎に次ぎて賊徒夜半に不意に起りて鶴崎を襲ひ力を抜く我営に入る我兵を深夜を以て

鼾を高うして熟睡せり此物音に驚き俄然に起て之と戦ふに誤て自ら傷つくるものあり夜明て巡査隊を海路より府内に赴き賊を臼杵に赴く

此日熊本鎮台兵一大隊を馬見原より高森へ進む十七日人吉の賊八ッ春山の険隘を固く守りて我兵の湯治村に入ると距ること我軍湯治を得れば人吉に入るの便りを得ると以て後軍議して国見山の絶険を踰へ八ッ春山の背後を衝んと

山田少將賊巣を探て兵を分配す

山口の賊魁町田梅之進官軍に抗せんと衆を聚めて密謀を企つ

を國見山と肥後の國とに接し第二の高山にして其頂上の如きい土人等神境と称して齋戒沐浴せざれを登ることなし我軍夜半兵を潛めて此嶮を陟るに山中一條の樵路ありて巖を傳ひ岨を攀て漸く辛うして其絶頂に達を俯して賊壘を瞰るに一齊に発砲を其聲山岳に響き渡り恰も百千の雷の一度に落かゝるがごとし賊軍仰ぎ視て愕然として然ども登り来りて我軍に抗せんとす我軍俯して賊を壘中に撃つ賊い之に堪たまり得ず壘を捨て遁る然るに俄に狂風大に起り樹を動かし砂石を飛ばし大霧山中を蔽ふ既にして暴雨大に至り山気骨に徹る土人の先導くるの神の崇りありとりひて人の色なし我兵山中に起臥すること一晝夜翌日に至りて鷹の巣陷り椿山拔くること十九日に至りて湯治村の賊自ら壘を焚いて遁る此日鹿兒島の軍い大隅

福山の賊擄と衝て粮食と奪ふの議を決し清輝高雄の二艦を以て河村参軍大山曾我二少将等三中隊の戦士之に乗り午前十一時福山港に至り船中より発砲を既にして強雨大に降り迅雷起る砲声と互ひに答へ海湧き岳震ふ我兵上陸して賊と斫りて火を放つ賊庫に貯ふる処の糧一千石忽ち灰汁とかりて海に洒ぐ賊遁て都の城に走る十八日朝水俣口の長官川路少将参謀傳令使と倶に一小隊を以て出水口の哨兵線を巡て長尾山の麓に至る賊の哨兵之を望て砲撃を我兵進て賊の側面より射撃を金毘羅山の哨兵来て賊の正面を撃つ賊山を下り左翼の深渡瀬に散走を我が兵進て大野に入る此日や賊の塁を拔くこと三十三戦門不意に起り大勝利を得て軍機旧に復を同日豊後口の賊い鶴崎より戸次に出て川舟に乗りて

犬飼に達せる所區務所なるべし警察所を暴掠せる佐伯臼杵の中路に三重驛なり其驛中頗る富めりと以て賊兵の掠畧せる所多しと云ふ初め賊軍掠奪撤鎮撫掛と二手に分れて掠奪撤の者先きに市中を掠奪し去りて後鎮撫撤来りて曰奸賊人民を掠奪せる者なりと聞く未だ此賊に遇はずや其既に掠り去る旨を説けば伴りて怒り之を捜索せんと言ふて去る此日豊後の賊岡城に入りて據守せる初め岡の士族井上安宅等坂梨の間道より竹田の賊と通じ不意に賊を導きて旧城に入らしむ賊徒四方に哨兵を布き一朝にして備へを厳にす士族吉田某吉野某等は身を遁れて大分に走る十九日水俣口の川路少將は自ら長尾金毘羅諸山の地理を察して進んで鬼嶽の山麓に堅壁を設け左翼の兵は百間河原に正面は深渡瀬に兵を置く二十日水俣口の軍鬼嶽の

中吉尾村の
哨兵よ来りて
鈴木弥介降
伏せ

下より戰ふ夜中より至り賊又來り襲ふ此日鎮臺兵の馬見原より豊後口より至るものヱラ原村より賊の本候兵を斃すヱラ原へ竹田と去るあゝ二里あり二十一日第三旅團大河内本営より賊兵の降るもの九十人あり之と賊徒降伏の始めとす初め賊四人中吉尾村の哨兵より来り降る其内より鈴木弥介なるものあり賊の分隊長ゝしく頗る事理を知る者あり初め降伏しく再び賊営より

帰り同隊の卒を率ゐて来り降るあり此日鎮臺兵進むで竹田の賊と戰ふ臺兵は野津大佐の率ゐる所なり二十二日人吉攻撃の佐敷口の軍大野の賊を不意に撃つ賊狼狽して糧食を棄て走り拓植村を保つ是より於て我が兵線は國見山より鏡山に亘りて長サ四里に餘あり此日鹿児島の軍官賊俱に砲撃を海軍より大砲を発するとの頻りに紅電海上に閃き雷声山に響く

と終日あり二十三日鹿兒島縣廳の邸内に榴弾来り落つ官吏大に狼狽するものあり是より先き縣吏往々軍機を論じて陸海軍の蹉跌あるを議し榴弾一たび落て其蹉跌の甚しきを視て岩村縣令戯れに諭して曰く我が屬官に禁ずべきものの二ッあり其一は文官にして武事を議するを禁じ其実は机上の談に過ぎざるのみ又病と裝て禁ずと當時攻圍を受くるの城中にあるに仍て此弊ありて人吉攻撃神の瀬口の兵三國山添山等を拔く賊の兵神の瀬を棄て走る此日佐敷口に三浦少將進撃して大関口より今井坂に出る延長三里の間賊堡數百を列したるに我軍あとくくあとを陷いる賊大に破れて味方死をもとどもも顧ず弾藥兵器を棄て遁る我が兵進んで其大野の本營を突き更に進んで鏡山を陷いる籠瀬の賊營より火起り蓋し賊の自燒して遁

るゝあり 九月二十四日 人吉の攻撃兵ハ賊の来り襲ふ紙神の瀬より迎へ戦ひく之を走らせ是より先き鹿児島よりおいくる日々砲戦あるとゝも悉く記せる紙能せず 此日我兵西田橋高麗橋より進みゝ武山山脈の賊塁を奪ハんとして賊兵と半途より出で逢ふ さり然るに賊兵ハ我ゞ中堅を断つゝ斥候と牙軍と連絡まるあと能はず我ゞ兵弾薬を棄て遁る永田少佐怒りて奮進して戦ふと頻りなり遂に賊弾に中つゝ戦死せ此夜賊来ゝ我ゞ哨線外の篝火を滅さんとゝ哨兵撃てあるゝ紙退く我軍常に線外に篝火を焚き連ねて賊の来る路を照らせ賊来らんとすれば先づ篝火を滅さるゝあとを得ず賊の婦女往々篝火を消せあとに従事せとりゝ 二十五日 拂暁警視隊の兵出水矢筈嶽の賊と襲ひく数塁を拔く 此日豊後口の賊三隊に分れて佐伯に入る中央ハ藤

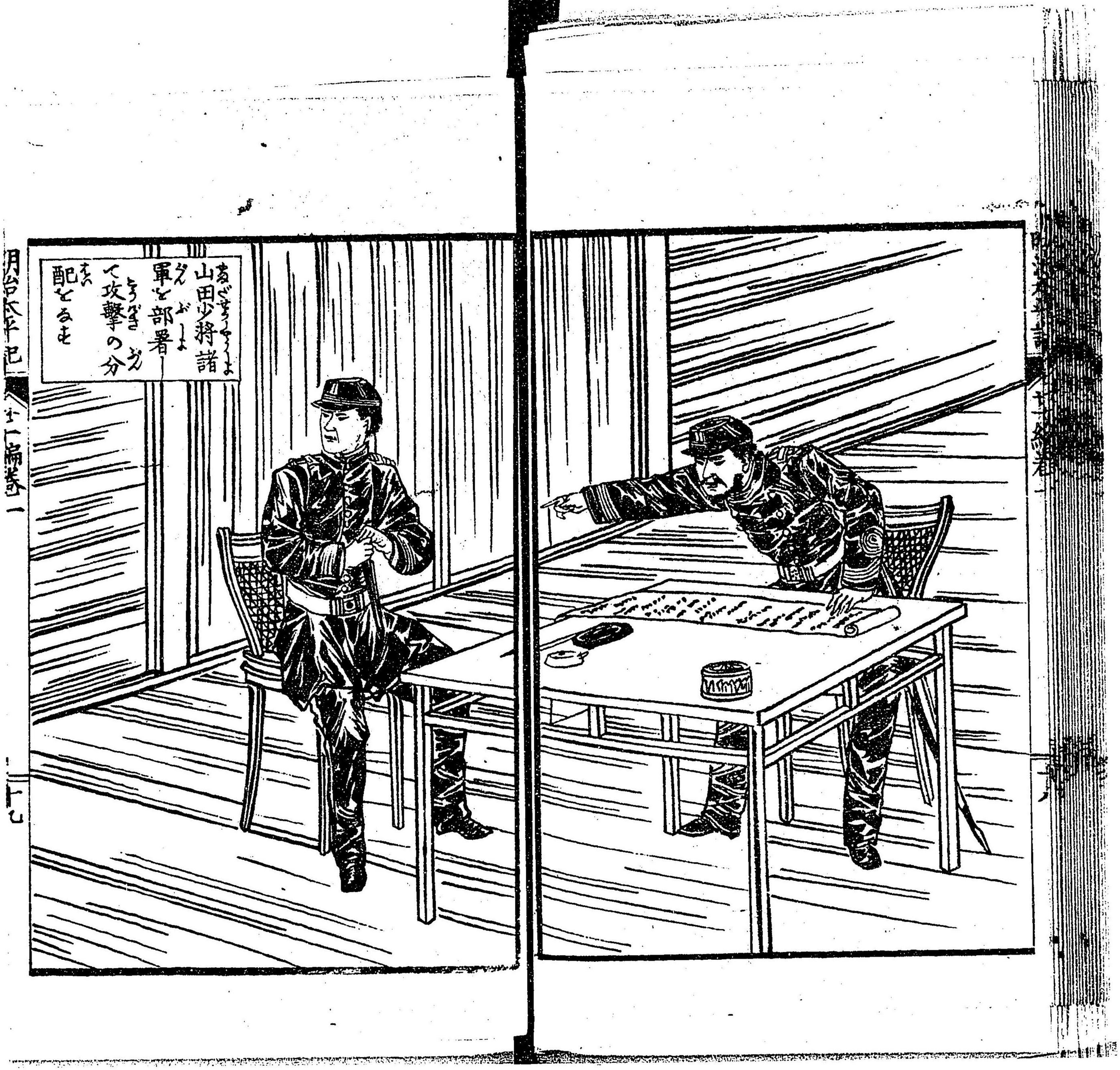
永田少佐奮
進して戰ひ
賊弾に中り
て死せ

原道左翼を中野の間道より塩濱に出づ右翼は天神津留を筏にくだり三方より城下に進み入る是より先き士民悉く賊を避けて近郷に走る佐伯を無人の境たると以て賊止むを得ず一時に引て去る士民賊の去ると以て来り聚る賊を諜者として知り直ちに来り襲ふて あれを脅迫し之を掠奪まとり二十八日に至り賊番兵を留めて去る此日竹田を攻撃を警視隊田中口辻口竹田間道の三路より進んで賊の二墨を拔く二十六日水俣口の賊兵拔刀して矢筈嶽の墨を斫る撃てあるを郤く賊の小隊長鳥居主計を斃す此日山田少將は球摩川を渡り一の俣本營に至る二十七日人吉の賊照赫山に據て我が進軍を阻む山田少將大槻の山に上りて兵を指麾し急に進んで之を拔く此日豊後口の全軍議して竹田を進撃を警視隊は鏡川を渉りて

七里村田代等の胸壁を衝く賊の固く守ると以て拔くあと能はず臺兵い玉來口を攻擊して亦克つあと能はずして俱に原の線を守る二十八日別働第二旅團の本營を國見山に移す我が哨兵線の進めるあと人吉を去る十町許りに至ると云ふ二十九日水俣口の兵賊兵のエラゴに擬して守る者を破る此日別働第二旅團進んで人吉城を攻擊せんとす第二旅團の兵あとが援と

なす初め二十六日に於いて山田少將諸軍を部署して曰く隈川より右翼い參謀高島少佐受持の方面を其兵を右翼第三旅團兵と連絡し左翼い第二旅團兵に連絡し吉田村より大坂間の地方に向つて進入すべし隈川より左翼神の瀬川島までの一線い第二旅團の兵をして左右に連絡し進入の筈川島より左翼大槻を徑て照赫通りまでの一線い山地中佐受持の方面とし兵

を分つて二隊となし先鋒豫備の別となを其先鋒を單進突擊して人吉に達せんとす以て目的となるべし其豫備は先鋒兵行進の後路を警備して糧食弾藥運輸の便を得せしめ又緩急ともに先鋒の應援をなし且つ左右翼の二兵と連絡して進入をべし照藤通りより左翼は万江通りを径て除烏帽子峠までの一線へ堀大佐引卒の屯田兵受持の方面とし其兵を以て左右に連絡して進入まべし除烏帽子山より高野までの線路を中佐中村尚武受持の方面とし其兵を以て左右に連絡して進入まべし高野より遠持と径梶原までの線路を山川中佐受持の方面とし其兵をもつて二となる先鋒豫備の別をなまあたかも五家の庄口久連子より左翼尾前に至るまでの線路へ中佐中村重遠受持の方面と速に江代古屋敷の賊を衝擊して漸次に右


山田少將諸軍を部署して攻擊の分配をなす

翼と連絡をべく又左翼奈須通りを警備をべし
二中隊の兵を日當に留め全く固守の備をなし
く尾前を保護をべし但し事止む能ざるに出
る時を臨機の處分となして日當を固守すべし
右諸口の進軍は来る二十九日を以て各兵とも
に進入をべき地位に整頓し三十日拂曉各方面
りしく攻撃をべし但し晴雨を論ぜず尤も大
霧にして咫尺を辨ぜず洪水道路を絶つの如き
時を便利の期と候て直ちに攻撃をべし尚又進
入の節左右の連絡を通ず報ずるを為に瞻望便
なる地に於いて時々揚煙をべし此日本営を神
の瀬へ移を我が哨兵線に一勝地摧現山より高
津山大槻水無直木江代に亘りて殆んど三十里
に連絡を賊に渡り切通し影向山照赫麓澤
等の險に據つて拒ぐの准備をなし
此時の戦争いうなる勝敗なるを次の巻

之説き分るを聆ねゝ

明治太平記廿一編卷之一畢

明治十年九月